

# 平成 27 年度 附属小学校・附属中学校「教育相談室」活動報告

2015 University Elementary and Junior High School “educational counseling room” activity report

竹口 佳昭, 小倉 正義

TAKEGUCHI Yoshiaki and OGURA Masayoshi

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 31 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.31, Feb., 2017

## 平成 27 年度 附属小学校・附属中学校「教育相談室」活動報告

2015 University Elementary and Junior High School  
“educational counseling room” activity report

竹口 佳昭\*, 小倉 正義\*\*

\*〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学 地域連携センター  
TAKEGUCHI Yoshiaki\* and OGURA Masayoshi\*\*\* Center for Collaboration in Community  
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

**抄録：**鳴門教育大学の附属小学校・附属中学校では、平成13年度からスクールカウンセラー活動を行っている。平成27年度からは、生徒指導支援センターからスクールカウンセラーが派遣されるようになった。本報告では、附属小学校・附属中学校を中心とする「教育相談室」の活動に関して、平成27年度の活動内容、相談件数などについて報告し、今後の課題を検討する。

**キーワード：**附属小学校・附属中学校、教育相談室、スクールカウンセラー実習、スクールカウンセラー日より、スクールカウンセラー授業

**Abstract :** School counselor activities have been carried out at Fuzoku Elementary School and Fuzoku Middle School Attached to Naruto University of Education since AY2001. From AY2015, school counselors have been dispatched from the Center for School Support of Guidance and Counseling. This report covers activity content, number of counseling cases, and other aspects of AY2015 activities and considers future challenges regarding the work of the “Educational Counseling Office” that primarily serves the elementary and middle schools.

**Keywords :** elementary school attached to university, middle school attached to university, educational counseling office, school counselor training, school counselor news, school counselor course

## I. はじめに

鳴門教育大学（以下、本学）の附属学校園では、附属小学校・附属中学校を中心として「教育相談室」が運営されている。

平成13年度から、附属学校園には本学の臨床心理士の資格をもっている教員がスクールカウンセラーとして配置されていた。平成27年度からは生徒指導支援センターの設置に伴い、生徒指導センター研究員の第一著者（竹口）が附属小学校・附属中学校の専属のスクールカウンセラーとして配置された。

本報告では、平成27年度の「教育相談室」活動を、附属小学校・附属中学校におけるスクールカウンセラーの活動、スクールカウンセラー実習、スクールカウンセラー日より、スクールカウンセラー授業の4点から報告する。

## II. スクールカウンセラーの活動

## 1. 活動形態

第一著者が附属小学校に毎週金曜日に週1回10時から17時までの6時間、附属中学校に毎週水曜日に週1回10時から17時まで6時間スクールカウンセラーの活動を行い、第二著者（小倉）は不定期でスクールカウンセラーの活動に携わった。

カウンセラーの活動は附属小学校・附属中学校とも教育相談室で行った。

## 2. 活動回数、相談人数、相談件数、相談内容

活動回数は、附属小学校が46回、附属中学校が40回であった。

平成27年度のスクールカウンセラーの相談人数、相談回数は表1・表2の通りである。

附属小学校の相談人数は、全体で39名であった。内訳は児童が16名、保護者が8名、教職員が15名である。

相談回数は、のべ125回であった。このうち児童が47回、保護者が54回、教職員が24回であった。なお、養

表 1 平成 27 年度の小学校の相談人数・相談回数

面接の対象	相談人数	相談回数
児童	16 名	47 回
保護者	8 名	54 回
教職員	15 名	24 回
計	39 名	125 回

\* 家庭訪問 8 回

表 2 平成 27 年度の中学校の相談人数・相談回数

面接の対象	相談人数	相談回数
生徒	9 名	40 回
保護者	9 名	60 回
教職員	9 名	39 回
計	27 名	139 回

\* 家庭訪問 5 回 \* 授業 3 クラス

養護教諭は毎回情報交換をしているので、このデータには含まれていない（表 1）。

児童の相談件数は 16 件で、相談内容は人間関係についての相談が 10 件と最も多く、いじめについての相談が 3 件、不登校・身体症状・学習についての相談が各 1 件であった。

保護者からの相談は 8 件で、子育てについての相談が 4 件と最も多く、不登校についての相談が 3 件、身体症状についての相談が 1 件であった。

附属中学校の相談人数は、全体で 27 名であった。内訳は生徒が 9 名で、保護者が 9 名、教職員が 9 名であった。

相談回数は、のべ 139 回であった。この中で生徒は 40 回、保護者が 60 回、教職員が 39 回である。なお、養護教諭は毎回情報交換をしているので、このデータには含まれていない（表 2）。

生徒の相談件数は 9 件で、相談内容は人間関係の相談が 4 件と最も多く、いじめについての相談が 2 件、不登校・学習・身体症状についての相談が各 1 件であった。

保護者の相談件数は 9 件で、相談内容は不登校についての相談が 3 件、子育てといじめについての相談が各 2 件、人間関係・身体症状についての相談が各 1 件であった。

### 3. 活動内容

附属小学校の活動内容は、児童・保護者との個別面接、教員へのコンサルテーション、昼休みや放課後の児童とのプレイ、授業中の行動観察、個別学習支援、給食時間の昼食参加、不登校児童宅へ家庭訪問である。

附属中学校の活動内容は、生徒・保護者との個別面談、教員へのコンサルテーション、「いじめ」の授業、生徒指導委員会への参加、不登校生徒宅への家庭訪問である。

教員へのコンサルテーションを行う中で、児童・生徒の心の動きについて話していると、子どもたちの心が理解でき、顔の表情が緩んでくるのがみてとれた。

## 4. 生徒指導委員会（附属中学校）

### 1) 組織

生徒がよりよい方向に成長するように、教員が生徒により効果的な指導を行う方法について話し合う目的で発足した。構成員は、学校長、教頭、主幹教諭、生徒指導主事、該当生徒の学年主任及び担任、養護教諭、鳴門教育大学生徒指導支援センター長、スクールカウンセラーである。

### 2) 会合及び内容

会合は年 1 回、2 時間半程度行われる。各学年の担任から指導援助を特に必要とする生徒についての関わりの経過等が報告され、質疑応答が行なわれる。その後、鳴門教育大学生徒指導支援センター長が生徒指導の立場から指導助言を行い、スクールカウンセラーが臨床心理学的な立場から助言を行った。

## Ⅲ. スクールカウンセラー実習

本学臨床心理士養成コースの実習の一つとして、スクールカウンセラー実習があるが、平成 27 年度から附属学校園でもスクールカウンセラー実習の受け入れを開始した。初年度である平成 27 年度は、附属中学校で 2 名、附属小学校で 2 名が実習を行った。

附属中学校の 2 名は、スクールカウンセラーの面接に陪席して交互に記録をとった。教育相談室に来室した不登校生徒とゲームをしながら、時には内面に迫るような話をして、こころの交流を図った。

附属小学校の 2 名も、スクールカウンセラーの面接に陪席して記録をとった。放課後、児童の個別学習支援をしたり、ゲームをしたりする中で、会話を通してこころの交流を図った。

空き時間には、教員の職務内容やスクールカウンセラーの心構え、面接の振り返り等を行った。毎回、実習ノートに感想を記入し、第一著者がコメントした。

## Ⅳ. スクールカウンセラーだより

毎月 1 回「スクールカウンセラーだより」（巻末資料 1）を計 11 回発行し、児童・生徒一人ひとりに配布した。これはスクールカウンセラーの活動や勤務日を保護者や児童・生徒に周知することと、こころの動きや他人との関わり方やアドラーなどの心理学者の考え方を紹介することで、スクールカウンセラーに興味・関心を持ってもらうことを目的とした。

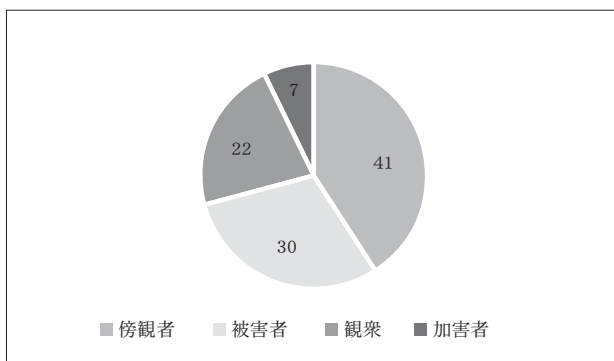
『こころころころ』の発行を楽しみにしている保護者や教員がいると養護教諭から耳に挟んだ。保護者や児童・生徒の来室者数がだんだん増えた。スクールカウンセラーだよりの効果が徐々にではあるが、現れてきている。

## V. スクールカウンセラー授業

五十嵐かおる原作の「いじめ」というマンガ（陸上部女子部長の日富（加害者）が陸上部員の実咲（被害者）をいじめるという設定。実咲の友だちの優花とまあちゃん（傍観者）・陸上部員（観衆）等が登場人物）を第一著者が教材化し、生徒と距離感を縮めるために、それを用いて附属中学校の2年生3クラスで授業を行った（資料1）。



（資料1） いじめ教材の一部



（資料2） どの立場がいじめを解決すべきですか

授業後のいじめを解決すべき立場についての意見は次の通りである（資料2）。

〈解決すべき立場と意見の一部〉

（傍観者：41％）

- ・優花とまあちゃん（傍観者）が実咲（被害者）を励まし続け、一方で先生や親にいじめの事実を知らせる

（被害者：30％）

- ・実咲（被害者）が先生や親や大人や友だちや男子部長やカウンセラーに相談する

（観衆：22％）

- ・陸上部員（観衆）どうして相談して、少しずついじめをやめていく

（加害者：7％）

- ・日富（加害者）が自分でやめる

〈生徒の感想〉

- ・解決方法は様々あった

- ・一人で解決するのは無理で、一人でも多く仲間を作り、いじめが長引かないようにする

〈授業者の感想〉

- ・教員とは違う角度から、被害者・加害者・傍観者・観衆の4つのそれぞれの立場で考察し、じっくりと「いじめ」について考えさせることができた。

## VI. 成果と今後の課題

### 1. 成果

上記の活動を通して感じている平成27年度のスクールカウンセラー活動の成果について、下記に述べる。

- ① 附属小学校・附属中学校の不登校児童・生徒は、全国平均の1.17％（文部科学省2014）に比べて下回る。その少ない不登校の児童・生徒や保護者と面接ができ、特に保護者の心の安定につながった。
- ② 教員が、スクールカウンセラーとの関わりの中で、子どもの内面の心理状態を理解し、教員自身の心が安定した。
- ③ スクールカウンセラーから「いじめ」の授業を受け、スクールカウンセラーに「いじめ」について相談する生徒がでてきた。授業を行うことで、相談相手としてスクールカウンセラーを身近に感じることができたのであろう。
- ④ 附属小学校では、スクールカウンセラー実習生が学習の苦手な児童の学習支援をした結果、その児童が自信を持って授業に取り組み、明るく学校生活を送ることができるようになった。
- ⑤ スクールカウンセラーが授業観察をしたり、児童と給食をともに食べたり、児童・生徒と一緒に遊んだりして、新たな視点から理解した子どもたちの内面を教職員に伝えることで、新しい風を吹き込むことができた。柴田（2013）は、当事者のみでは得られない視点や新鮮な発想を提示することで、教職員自らが問題解決の糸口をつかんでいけるようなコンサルテーションが必要であると述べている。本活動でも、柴田（2013）が述べるような活動ができたのではないかと考える。

### 2. 課題

第一著者は附属小学校と附属中学校に勤務しているため、両校の児童・生徒と触れあうことができる。そこで発見した様々な子どもの新たな面を多くの教員と共有していくことが課題である。内田（2011）は、教職員との連携というものが非常に重要であると述べている。吉田（2011）もスクールカウンセラーとして大切なことはつながりを作ることと述べている。



スクールカウンセラーと教員が、職員室で雑談できるような関係性を構築し、子どもたちが元気に楽しい学校生活を送ることができるように、スクールカウンセラーがもっと積極的に動いて子どもたちのいいところを伝えていきたい。

附属中学校の生徒指導委員会の開催が年1回なので、子どもたちの成長のために回数を増やすように働きかけていくことも必要であろう。

附属小学校でも教員の負担が軽減するような児童理解のための会を持てるように働きかけていきたい。

自分のためだけでなく親の期待に応えようとして黙々と頑張っている児童・生徒がいる。そのような児童・生徒は何らかのストレスを抱え、もてあましている場合もあるだろう。そのような子どもたちがストレスと上手くつきあっていくために、予防的な活動であるストレス

マネジメント教育等を行いたい。

## 引用文献

文部科学省（平成26年8月7日）「平成26年度学校基本調査（速報値）の公表について」

[www.mext.go.jp/component/b\\_menu/.../1350732\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/.../1350732_01.pdf)

柴田恵津子（2013），『学校が求めるスクールカウンセラー』，村瀬嘉代子監修，遠見書房，pp.42－51

内田利広・内田純子（2011），『スクールカウンセラーの第一歩』，創元社，pp.80－104

吉田圭吾（2011），臨床心理学増刊第3号『スクールカウンセリング 経験値・実践知とローカリティ』，村山正治・森岡正芳編集，金剛出版，pp.36－40

# こころこころこころ

2015, 10, 9（金）  
附属中学校 スクールカウンセラー通信  
竹口 佳昭

## あるゆるものに感謝！

先週、新潟に行ってきました。新潟の海は、もう冬の海になっていました。海の色が黒っぽく、白波が立っていました。空も冬の空でした。明け方にかけて雨が降っていたのか、路面が濡れ、今にも泣き出しそうな曇り空が空全体をおおっていたのが印象的でした。

このどんよりとした冬の曇り空を見ると、いつも思い出すことがあります。

若い頃、一緒に働いた学校の後輩のつぶやきです。

「瀬戸内海側はいいですね。冬にもかかわらず、こんなに空が透き通り、晴れ渡っていて、本当に気持ちがいいですね。」

僕は、兵庫県の日本文学に近い山間部に住んでいましたから、冬が来ると早く春が来ないかなあと、いつも思っていました。どんよりとした冬の空を見ていると、心が重くなり、しんどかったんです。」としみじみ語っていました。

日本海側に住んでいる人の気持ちを知らなかった私（冬に晴れの日が少ないことは知っていましたが、その地方の人の気持ちがありえて考えたことがなかったです）にとって、その話は新鮮でもあり、自分が経験していることなどは、ほんの小さなことなんだということに改めて気づきました。

そして、冬の晴れた日に感謝をしなければならない。当たり前だと感じていることは、本当はそうではなくて、感謝すべきことなんだということを教わりました。

人は、病気になって、初めて健康のありがたみがわかるし、何でも失って初めて気づく、あるいは改めて気づくのかもしれません。

その後輩は、言っていました。「そういう冬の辛さがあったから、僕は頑張れたんです。踏ん張る力をその気候からいただきました」と。

学校では行事が目白押しです。人間忙しくなると、余裕がなくなります。そうするとストレスに感じるが増えてくるのが多くなりがちです。私たちは、ストレスや逆境を乗り越えるごとに、一回り人間が成長します。ストレスと聞くと、何か悪いように思いがちですが、そのストレスを乗り越えることで人間、成長するのです。

ストレスや逆境を自分一人で乗り越えられそうにない時は、誰かの助けを借りればいいのです。助けてもらうことも大切です。



10月の来校予定

21日（水）・28日（水）

10:00～17:00

（巻末資料1）